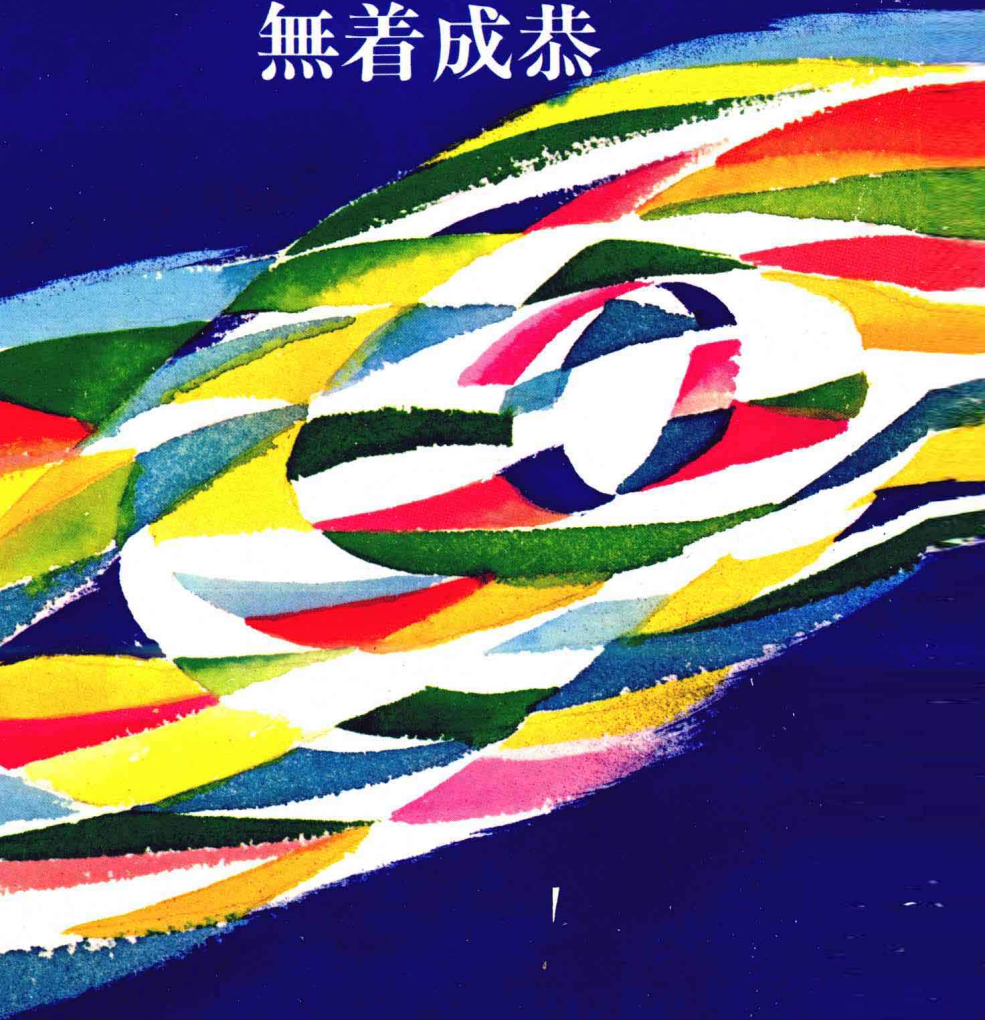


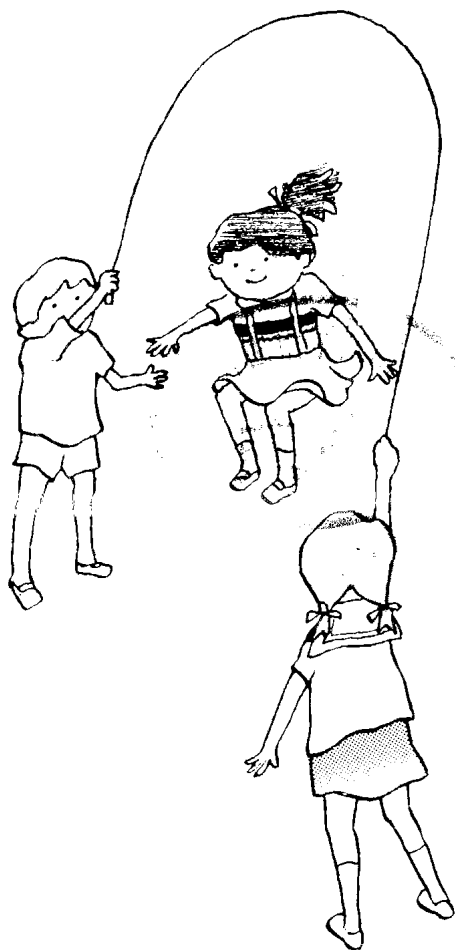
うた
ヘソの詩

無着成恭



うた ハソの詩

無着成恭



毎日新聞社

無 着 成 恭 (むちゃく せいきょう)

1927年、山形市・曹洞宗沢泉寺に生まれる。
48年、山形師範学校を卒業、山形県山元中学校
に勤務する。現在、明星学園小・中学校勤務。
64年からTBSラジオ「全国こども電話相談室」
の回答者もつとめている。

主な著書『山びこ学校』(角川文庫),『続・山びこ
学校』(むぎ書房),『教育ノート』『第二教育ノート』
(凡書房),『教育をさがせ』『教育のおそろし
さと大切さ』(文化出版局),『無着成恭の詩の授
業』(太郎次郎社) 他。

へソの詩 うた		定価 一・二〇〇円	一九八三年三月一日 第一刷 一九八四年四月五日 第四刷	著 者 無 着 成 恭	編集人 川 合 多 喜 夫	発行人 関 根 望	発行所 毎日新聞社	東京 千代田区一ツ橋 大阪 市北区堂島 北九州 市小倉北区紺屋町 名古屋 市中村区名駅	印刷 中央精版 製本 佐久間製本	© 無着成恭 一九八三 (検印省略)
------------------------	--	-----------	--------------------------------	-------------	---------------	-----------	-----------	--	---------------------	--------------------

Printed in Japan

目 次

うちの父さん	99
トイレ	95
ようちえんのとき	91
豚の世話四篇	85
ごはんの時に	81
プリンづくり	76
たまご	72
豚の出産	66
牛のお産	61
いただきます	56
金魚すくい	52
赤ちゃん	48
添い寝の詩	34
ヘソの詩	7

かぎつきの日記帳	107
いたずら	113
まちどおしい夏休み	117
菊の花	121
友だちはいいな八篇	125
姿勢の詩六篇	136
設計図	144
マネキン人形	148
警察犬	152
風船	157
はやくはやく	162
失恋	169
もうもどらないもの	173
私の名前	178

目ざめるとき三篇

182

親を意識するとき三篇

190

公衆電話

197

心の翼

201

追いかける

206

かすみ草

209

親を乗り越えるとき四篇

213

握手

225

あとがき

へ
ソ
の
詩^{うた}

ヘソの詩

ヘソの緒

六年 杉野美樹

私が六年生になったとき
お母さんが

「あなたにとって

とっても大切なものを見せてあげる」

そういつて引き出しの中から小さな箱をだした。
ふたを開けてみると

ブタのしっぽみたいな物がいってた。

「これ 何？」

「あなたの ヘソの緒よ」

「えっ わたしの！ ヘソの緒！」

私はとてもびっくりした。

お母さんは

「乾いてしまつて小さくなったけど

あなたと私は、

このヘソの緒で

むすびついていたのよ！」

と教えてくれた。

私がまだお母さんのおなか中にいるとき

このヘソの緒をとおして

栄養分や酸素をもらつてたんですって。

そんなこと信じられないくらい

小さく乾いてるヘソの緒！

このヘソの緒で

私とお母さんは結ばれてたんだ。

それで私は生きてたんだ。

このヘソの緒がなかったら

私は生きていられなかったのだ。

そう思ったら

これはとっても大切なものなんだと思われてきた。

「ヘソの緒とおいてくれてありがとう

お母さん！」

私はそういった。

(’82年5月)

この詩を読んだとき、私は、「美樹のお母さん、えらい！」と、心の中で叫んでしまった。美樹のお母さんは、たぶん六年生になったら、見せてあげよう。六年生になったら、話してあげよう。(あるいは、初潮を迎えた日の夜とか) その日のくるのを心待ちにしていたにちがいない。ヘソの緒をとおして、お母さんが赤ちゃんに栄養分を送り、酸素を送り——そうやって赤ちゃんを育てるのであるということ。そういうことを、ヘソの緒の前にして話してやろう——そう思っていたにちがいない。

今は乾いて、小さくなってしまつて、なんの役にも立たないものになってしまつたけど、これがなかったら、生命がなかったんだ。これがなかったら、今の自分はなかったのだ。そういうことを語る一瞬が、母と子の間になればならない。そのことを、美樹のお母さんは見事に実践している。えらい！

でも、母親なら、誰でもやらなければいけないことだ。ただ、このことを、いつ、どのようなと

き、どのような条件をととのえて、話してやるか、ということが問題だ。そうしないと、母親の思いが、子どもの心にとどかない。子どもの心にとどくチャンスをはがさずに話してやることができるかどうか、というところに賢い母親か、賢くない母親かの分かれ目があるのだろう。

この詩を、六年生のクラスで、うんとほめて紹介してやった。そしたら、次から次へと「ヘソの緒」や「ヘソ」をうたった詩がでてきた。

六年 安藤 静穂

お母さんに

「私のヘソの緒とってある？」 ってきいたら

「今、見せてあげる」

そういつて押入れの中から出してきた。

私はドキドキした。

お母さんは玉手箱をあけるみたいに

そっとあけてくれた。

ソーセージのつなぎめみたいのが

はいつてた。

けむりはでなかったけど

ブーンとへんなにおいがした。

これが！

私のヘソの緒！

私とお母さんを結びつけてたもの！

私は

「ありがとう。お母さん」

そういつてしまってもらった。

(’82年6月)

六年 栗原青皇

ママに

「ヘソの緒見せて！」といったら

「バカ！

そんな物あるわけないでしょ。

あんな物とおいたって

ひからびちゃうんだから………」

といった。

私はあたまにきて

アッカカンペーをして自分の部屋にいった。

するとママが

「ちょっといらっしやい」といった。

いってみるとママのベッドの上に

ヘソの緒がおいてあった。

私はホッとした。

だってヘソの緒がないってきいたとき

私はママの子じゃないと思ったんだもん。

(’82年 6月)

六年 吉川実恵

お母さんからはじめてヘソの緒を見せられたとき

私は思わず

ワッ!? とさげんでしまった。

ヘソの緒ってこんなに気持ち悪いものだとは

思わなかった。

「私がうしろ向いているうちにしまって」

といってうしろを向いたら

「はい、しまいましたよ」といった。

安心してふり向いたら

こんどはアップで見せられた。

「いじわる！」っていったら

「自分のだから気持ち悪いなんていっちゃだめ！」って
しかられてしまった。

(’82年6月)

六年 木内道子

私のヘソの緒は木箱の中にしまつてあつた。

なんとなくなつかしいような

へんなにおいがした。

こんな小さな こんな細い ヘソの緒。

これが私とお母さんをつないでたんだ。

プツンと切れてしまひそう。

でも切れなかったんだ。

あつ 大発見！

親子のきずなっていうけど

このヘソの緒みたいなものなんだ。

ねっ そうでしょう！

先生！

（'82年6月）

この四篇の詩も、杉野美樹さんの詩に触発されてできたものである。親と子の間にしか成立しない厳粛な儀式が四者四様であることに注目したい。母と子の絶対的な信頼関係をたしかなものにする、ひとつの儀式である。それを、安藤さんのお母さんは玉手箱をあけるみたいに、そっとあけてくれた。そこには、いのちがはいっていたのだから。安藤静穂という一人の子どもの生命がどれほど重いものかを、母親は演じてくれている。栗原さんのお母さんは「そんな物あるわけないでしょ」といって、子どもを追い払っておいで一生懸命さがしている。目に見えるようだ。吉川（母）さんの茶目っ気たっぷりの演出もまたおもしろい。そしてヘソの緒に親子のきずなを発見した木内道子さん。

*

ところで、赤ちゃんのヘソの緒の中を流れている血は、お母さんの血か赤ちゃんの血か、わかっているのだろうか？

赤ちゃんは、お母さんのお腹の中で、ヘソの緒をとおして、栄養分や酸素をもらって大きくなるんだということは聞いて知っているようだ。その栄養分や酸素を運ぶのが血液だということも、子どもたちはお母さんから聞いて、なんとなく知ってるようだ。だから、ヘソの緒というのは、いわば血管で、母胎と赤ちゃんを結びつけているパイプみたいなものだというふうにイメージをつくっているら